

女子大学生の自己愛傾向と友人関係

—友人葛藤場面における応答と“本音”の違い—

GH091007：野 口 真 二

指導教員：若本純子准教授

問題と目的

青年期の友人への認識は従来の友人関係とは異なり、「表面的」であるとの指摘がされてきた(大平, 1995; 岡田, 2003)。このような青年期の友人関係の変化の影響は、特に青年期女子の友人関係において心理的影響を与えることが指摘されている(佐藤, 1995; 石本他, 2009)。これらは、青年期女子が友人関係をより重視し、友人に対する捉え方、対処を様々に行っていることが考えられる。

そういった背景には、「表面的」な友人との関係の中に、自分は傷つかないことを最優先する自己愛の様相が想像される。

自己愛に関して、様々な自己愛理論を包括するものとしてGabbardの自己愛理論が注目されている。その中では、自己愛を顕在的に表すタイプと潜在的に表すタイプの2つが唱えられている(Gabbard, 1997)。

しかし、自己愛タイプの双方を包括的に取り扱う研究はあまり多くない。さらに、自己愛の問題は平常場面より葛藤場面で顕在化することが想定される。臨床的に意義ある検討を行うには、できる限る実際場面に近い形で、友人関係の中で生じる葛藤に対する情緒や対処を具体的に捉える必要がある。

本研究では、青年期女子における自己愛と友人関係との関連を検討するにあたり女子大学生を対象として以下の検討を行う。①自己愛の誇大傾向と過敏傾向の双方を包括的に捉えた類型化。②自己愛の類型により友人葛藤場面における応答や“本音”の違いを検討した。

方法

調査方法 質問紙による調査を行った。(調査期間：2010年11月上旬)

研究協力者 A女子大学B学科の学生128名を対象に授業時間の中で(平均年齢20.1,

SD=1.44) 質問紙を配布し、回収を行った。

調査内容 1) 自己愛の過敏性に関する尺度(NVS) 上地・宮下(2009)がコフートの自己心理学を基に作成した、(1)他者からの承認・賞賛への過敏さ(2)潜在的特権意識とそれによる傷つき(3)恥傾向と自己顕示の抑制(4)自己緩和能力の不全からなる20項目を5件法で評定。

2) 自己愛の誇大性に関する尺度(NPI-S) 小塩(1998)による(1)「優越感・有能感」、(2)他者から「注目・賞賛欲求」(3)「自己主張性」からなる30項目に対して5件法で評定。

5つの友人葛藤場面 Rosenzweig(1962)の成人用P-Fスタディの中から5場面(2, 8, 13, 15, 20)を援用して、友人葛藤場面を作成した。それぞれ、花瓶場面、恋人場面、電話約束場面、ゲーム場面、友人疎外場面とした。なお、5つの友人葛藤場面の言葉は、現代青年に合うように口語に変更した。加えて、各場面に対して、「この場面の中で、あなたが感じることを、思うこと」、友人Aに対して「どう答えるのか?」という2つを問い、それらの回答がP-Fスタディの理論に基づく、「他責」「自責」「無責」の反応方向と「障害優位型」、「自我防衛型」、「要求固執型」の反応タイプに分けて分析を行った。応答のみでなく“本音”という新たな部分を加えた理由として、自己愛という文脈においては、友人葛藤を抱えた際に、自己愛の傷つきを守るために尊大な態度や情緒に表れるだけでなく、個人の内面の中で密かに自己愛の傷つきを抱えることもあるといった点を考慮してのことである。

結果と考察

包括的自己愛のクラスタの類型化と特徴

本研究の目的1として、自己愛を包括的にとらえるために、2つの自己愛タイプに関する尺度を用いてクラスタ分析を行った結果、Iクラスタ：注目賞賛欲求が低く、自己主張も低い群。IIクラ

スタ：対人的な過敏性が低く、自己主張が高い群。
Ⅲクラスタ：他のクラスタに比べて、誇大傾向が高く、優越感・有能感が最も高い群。Ⅳクラスタ：対人的な過敏性が高く、自己主張も高い群の4つのクラスタが得られた。

包括的自己愛クラスタと友人葛藤場面の応答と“本音”：方向とタイプの特徴

本研究の目的2として、各友人場面に対して、無回答者を除く119名の協力者の回答の分類を行い、それぞれの場面に対して、実際の応答、“本音”と包括的自己愛クラスタの度数をクロス集計し、 χ^2 検定を行った。なお、今回、サンプル数が十分でなく、各クラスタの度数分布に偏りがあり、有意差が出現しにくいと考えたため、有意水準を10%まで落として分析を行った。

応答の方向とタイプに関しては各場面別にクロス集計し、 χ^2 検定を行った。

包括的自己愛クラスタと応答の方向の違いを検討したところ、すべての場面において応答の方向に有意差はなかった。

応答のタイプに関しては電話約束場面（場面3）に有意な関連が見られた（ $\chi^2=21.78$, $p<.01$, $df=6$ ）。残差分析の結果、第Ⅰクラスタは自我防衛型の対処が1%水準で有意に多く、要求固執型が少なかった。第Ⅱクラスタは要求固執型の対処が1%水準で有意に多く、障害優位型が少なかった。第Ⅲクラスタは、障害優位型の対処が1%水準で有意に多く示された。第Ⅳクラスタは要求固執型の対処が5%水準で有意に多く、自我防衛型が少なかった。

この結果から、責任の所在の求め方には自己愛による違いがないものの、欲求不満に対する問題解決、対処に関して各自己愛クラスタの特徴が表れていた。第Ⅰクラスタは自己主張の低さから相手に要求せずにいるが、自分が注目したり、されたりする欲求の低さから、葛藤に対して自我防衛する形で自己愛を守ろうとしている傾向がある。第Ⅱクラスタでは、対人的過敏性が少なく、自己主張が高いというところから、問題事態の指摘よりも、友人に対して要求していく応答が多くなっていると考えられる。同じく、第Ⅳクラスタにおいても自己主張性の高さから要求固執の応答が多くなったものと考えられるが、一方で、自我防衛

の応答を抑えており、対人過敏的な自己愛の高さから友人への反応を抑制していることも考えられる。第Ⅲクラスタでは、自己愛的な優越感・有能感の意識の高さから障害優位の応答と関連をもち、友人の用事を考慮するよりも、自らの応答を知的に解釈を行い、友人よりも自らを優位な立場におくといった対処が推測される。

続いて、“本音”に関して各場面別に方向のクロス集計、 χ^2 検定を行ったが、すべての友人葛藤場面において有意差が見られなかった。このことから、どのような包括的自己愛のもちかたをしようと、心の中で思っている“本音”は変わらないということが明らかになった。

友人葛藤場面での応答と“本音”の一致・不一致 応答と“本音”に関して、回答の一致・不一致の方向をクロス集計し、 χ^2 検定を行ったところ、友人ゲーム場面において第Ⅳクラスタに有意な関連がみられた。（ $\chi^2=7.12$, $p<.10$, $df=3$ ）。残差分析の結果、第Ⅳクラスタでは、“本音”で感じている自責から無責へと変える応答が1%水準で有意に多く、同じく、5%水準で他責から無責へと応答を有意に多く変化させるという特徴が示された。

第Ⅳクラスタの人は、自己愛の過敏傾向が高い人たちである。この場面では、友人側の失敗、過失が明らかで、謝罪されるという場面で自身の自己顕示を抑制する形で友人を責めたいと思ってもそれをなかったかのように、あるいは、自らの責任を認めづらいといった応答に変えることが示された。

総合考察

本研究の目的1と2の検討結果から、自己愛の誇大傾向や過敏傾向が認知・情緒に影響を及ぼし、友人葛藤場面の実際の応答に特徴をもたらしていた。また、自己愛と友人葛藤場面において実際の応答といった対処に違いがあった。本研究の臨床心理学的な意義としても、自己愛の観点をを用いることで、青年期女子の葛藤や葛藤に対する対処の多様性を知ることができた点は、青年期女子の支援に関して、有用な知見と言えよう。